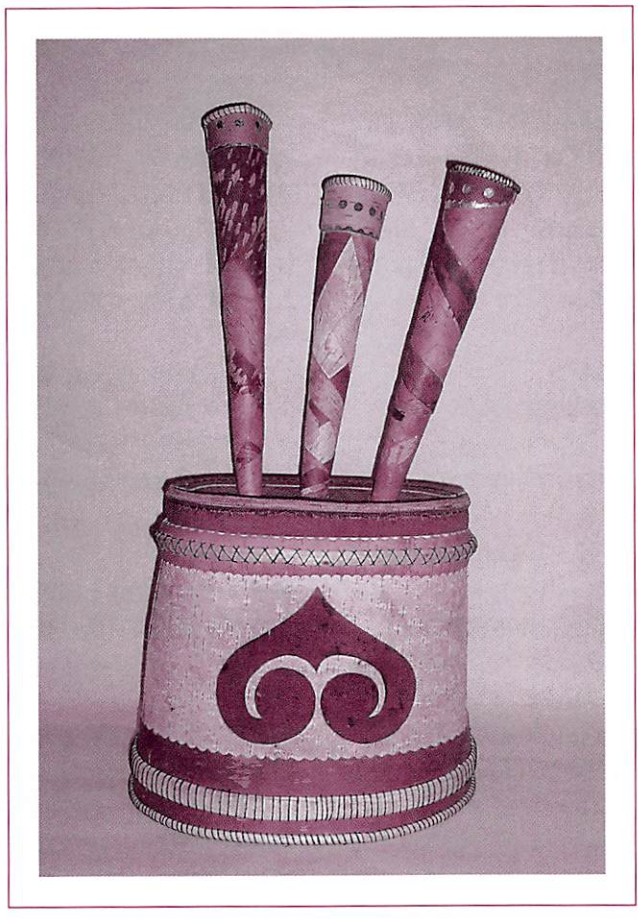
ISSN 0917－4729

北方民族博物館だより

No.71



H9.25　白樺樹皮製気鳴楽器（復元）
サハ（ヤクート）　サハ共和国／ヤクーツク
全高　64.6cm

本資料は、サハの「幻の音具」を再現した試作品である。サハの間には、「オロンホ」と呼ばれる英雄叙事詩が伝えられている。その中にクマ送り儀礼に使用された楽器についての伝承がある。その伝承をもとに復元されたのがこの資料である。白樺で作られた箱形容器状の底に穴を三カ所開け逆さにし、そこに三本の筒をはめ込む。反対側から大声を出すと三本の筒によって声が増幅するという仕組みである。現在サハはクマ送り儀礼を行っておらず、実物を目にする機会も稀（まれ）なことが、幻の音具とよばれる所以である。

1　表紙　白樺樹皮製気鳴楽器
2　第23回北方民族文化シンポジウム
5　ロビー展『世界の口琴』、ワークショップ『素晴らしき口琴の世界』
6　アイヌ文化講習会、北海道博物館紀行『白滝郷土館』
7　調査・研究『カムチャツカ調査報告』、『サハ共和国調査』
8　INFORMATION

北海道立北方民族博物館
Hokkaido Museum of Northern Peoples

第23回北方民族文化シンポジウム

2008.10.11,10.18-19
会場　オホーツク・文化交流センター（網走市）

一昨年から引き続き、「北方地域の博物館と民族文化」をテーマにシンポジウムを開催しました。キーワードを「現代の文化」「伝える」とし、民族文化の保存や伝承、普及・啓発のために博物館がなすべきことを考えました。国内外の博物館関係者等から、さまざまな実践例や提言をご発表いただきましたので、以下に概略を紹介します。

●第1部＜ロシア、中国の博物館活動＞
座長：佐々木史郎氏（国立民族学博物館教授）

リュドミーラ・ミソーノヴァ氏（ロシア科学アカデミー・民族学人類学研究所上級研究員）
「博物館所蔵写真によるUilta（ウイルタ）Identification（アイデンティフィケーション）の探求―サンクト・ペテルブルグの２博物館が収蔵するコレクションの事例研究―」

ウイルタの民族的帰属意識の形成について、人類学民族学博物館とロシア民族学博物館のコレクションを活用して検討する。両館には、19世紀末から20世紀初めに記録されたサハリン島やアムール流域などの先住民の写真が多数所蔵されている。

過去の文献には、「オロッコ」や「オロチ」などウイルタに対する20以上の名称が見出され、20世紀後半の国勢調査でも別の民族がウイルタと位置づけられていた。古写真を他の記録等とつき合わせて検証していくと、ウイルタのかつての氏族とその居住域、生業などが明らかになる。彼らは歴史的に大きな変化を被り、伝統文化の多くが失われた。

しかし、人びとは帰属意識を追求し、1990年に自称のウイルタを民族名としてソビエト連邦最高会議で法的に統一することに成功し、2002年の全ロシア国勢調査では人口341人と記録された。過去の写真コレクションは、民族名を確定する唯一の根拠ではないが、歴史的証拠として重要であり、また現代の人びとにとって精神的な支えにもなっている。

謝　黎氏（放送大学非常勤講師）
「中国の博物館における少数民族展示」

多民族国家の象徴として少数民族が展示されている中国の事例をとおして、伝統文化の後世への継承、「現在」の民族文化の表象、日本でのアイヌ民族文化展示に対するヒントなどについて検討する。

中国では、伝統のなかでも「よい」ものを残そうという考え方がある。「伝習館」という施設では若者が伝統技術を学ぶ場を設け、土産品の開発と販売により、利益を得るとともに伝統と現代を繋ぐ役割も持たせている。「現在」を展示すべきか否かは意見が分かれているが、変化・再生しつつある民族文化は各館で写真などにより紹介されている。

アイヌ民族の展示に関しては、各地のアイヌ民族のネットワークを作り、地域の特徴を示すことで多様性を見せることができるのではないか。女性の役割や、和人とアイヌの対比、儀式などの過去と現在を比較する視点を導入することも提案する。

●第２部＜博物館と関係機関との連携による活動＞
座長：岡庭義行氏（帯広大谷短期大学准教授）

スコット・カーリー氏（アラスカ州立博物館学芸員）
「アラスカ州の博物館および文化センターの水準の向上―博物館サービスにおける州立博物館がなすべき仕事―」

アラスカ州内には博物館や先住民が運営する文化センターが80以上あるが、多くは人口希薄で交通の不便地にある。これら施設の大部分に専門職員はおらず、ボランティアや兼職者が運営しているので、州立博物館は各種の支援を行なっている。

第一に財政援助で、多数の博物館等に助成金を配分するとともに、国や民間の補助金に関する情報提供や申請のアドバイスもしている。次に人材の派遣で、博物館運営の知識を有する大学院生をインターンとして送り込んでいる。第三に直接的な技術援助として、展示・資料管理・環境調査等の実務や指導、及び図書や機材の貸出も行なっている。また、ニュースレターの作成・保管や、統計的な情報の集約を行い、業績把握とその継承に努めている。

博物館は資料を安全に保管することが責務だが、儀式のために収蔵品を使用することもある。先住民とそのコミュニティとって重要な資料は、利用できてこそ価値があり、そこに博物館の必要性がある。

池田　貴夫氏（北海道開拓記念館学芸員）
「博物館が行ったサハリン朝鮮民族文化の調査―北海道開拓記念館とサハリン州郷土博物館の協力をとおして―」

北海道開拓記念館は、多分野の研究者と連携し、サハリ

ン州郷土博物館の協力を得て、2004～05年度にかけ「在サハリン朝鮮民族の異文化接触と文化変容に関する基礎的研究」という共同研究を行った。本プロジェクトでは日本領時代から現在に至る変遷の記録を目的とした。

これまでの研究が政治的、経済的、歴史的問題に集中してきたのに対し、発表者らは、文化の総合的把握に精力を注いだ。その結果、衣食住や精神文化などの軌跡を具体的に記録でき、新たな課題も明らかになった。また、古写真の複写、道具類の撮影、聞き取りなどをとおして情報を日ロで共有でき、収集した実物資料はサハリン州郷土博物館に受け入れられた。これらは、サハリン朝鮮民族の歴史を国際的に理解するうえで欠かせない資料であろう。さらに、2006年には当館でシンポジウムを開催し、サハリン朝鮮民族の素顔の一端を具体的に紹介するとともに、日本人の国際理解にも寄与できたと考える。

齋藤　玲子（北海道立北方民族博物館学芸員）
＜事例報告＞「 特別展『トーテムの物語～北西海岸インディアンのくらしと美～』における協力」

開催中の特別展では、北西海岸インディアンの芸術を中心として現代の文化に焦点をあてた。発表者は国立民族学博物館（以下、民博）で、カナダの北西海岸インディアンとイヌイトの版画に関する共同研究を進めている。民博から資料を借用して展示し、共同研究員による公開研究会も開催した。会期中には、網走市立美術館で民博所蔵の北西海岸インディアン版画の共催展示も行なった。

また、資料の制作者３名からコメントを寄せてもらった。これらは観覧者への解説とメッセージであるとともに、資料情報としても重要なものである。展示される側である先住民の理解と協力を得ながら進めることが理想だが、さまざまな制約の中で不可能な場合もある。小さくともできることから積み重ねてゆきたい。

●第３部＜現代のアイヌ文化＞
座長：渡部裕（北海道立北方民族博物館学芸主幹）

出利葉　浩司氏（北海道開拓記念館学芸員）
「現代の民族資料を収集すること　―北海道開拓記念館のアイヌ民族資料の収集を例に」

民族展示のために、将来に向けて今どのような資料を収集すべきか、事例紹介とともに問題提起を行なう。

北海道開拓記念館では、古い資料のみならず、それらの複製品や、「伝統的な」文様や技術をふまえつつ、現代風にアレンジされた芸術作品、観光みやげ品なども収集している。また、権利回復運動など社会的状況を示す資・史料として関連する印刷物なども集めている。しかし、文様や技術のみで文化を代表させることはできず、権利回復運動だけが人びとの生活ではないことも明らかである。

現代のアイヌの人びとの生活は、他の北海道民とほとんど変わらないが、「現代」を記録（展示）するために、日常生活で使う道具類などを収集していくべきだろうか。また、北海道庁の「北海道アイヌ生活実態調査」の結果など、プライベートな回答を含む内容を展示することや、それを示すための記録や収集をする必要があるのだろうか。

高橋規氏（財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構職員）
「今日的『アイヌ文化』の記録とその活用」

アイヌの精神文化を心の糧に生活する方々から聞いた話を例に、今日的な文化の記録と活用について述べる。
新築した家にかつてのチセにできるだけ倣った位置取りで窓を設け、神事の用具を置く場所を決めた男性。かつて山で成獣を捕獲した際の霊送り儀礼に倣い、有害駆除でヒグマを捕獲したときも、同様の精神で臨んでいる男性。カムイノミ（神々への祈り）は男性が行うものとされてきたが、儀礼を行う者が少ないため、かつて暮らしたコタン（集落）の跡を訪れ、畏れ慎みながらも自分や身内の加護をアイヌ語で祈る女性。ウサルフチ（下座の媼神）には話しかけても良いという教えに従い、ストーブの脇に皿で小さな火を起こし、自分なりのイアレ（祖先供養）を行う女性。彼らは、材料や道具、手順や規模などが、若い頃とは大きく異なることを意識している。だが、それらは“本来的な”アイヌ文化の変わり果てた姿のはずがない。

こうした行為について、記録者の判断で排除することなく、またむやみに誇張することもなく、そのまま記録するのが大事である。それは、将来にわたり民族誌構築のうえでも価値を有し、現代を生きるアイヌ民族への理解にも活用できると考える。

コメント　山崎幸治氏（北海道大学アイヌ・先住民研究センター助教）

出利葉氏と高橋氏の発表には共通の問題意識があると考え、自身の関心と絡めながら、まとめてコメントする。発表を聞き、国立民族学博物館で行われた『2002年ソウルスタイル：李さん一家の素顔の暮らし』という特別展が頭に浮かんだ。それは、五人家族が暮らすアパートの生活財（道具類だけでなく冷蔵庫の中身から手紙や写真まで）全てを調査・撮影してデータベースを作成し、それを展示するという画期的なものだった。アイヌ民族についても、こうした収集・展示の可能性を想定しておいても良い。ただ、いきなりモノを集めるのではなく、画像や音声などのデータでシミュレーションをしてから、収集するのが現実的だろう。モノの使い方、モノが媒介する社会的関係なども、多様なメディアで収集・記録すべきだ。

また、博物館（学芸員）のみが主体ではなく、当事者（先住民）と共同で活動することで、博物館も社会も相互に変化してゆく。資料の整理・保存・管理をきちんと行い、市民が活用できるようにしておくことが重要で、それが「開かれた博物館」といえるだろう。

●第４部「先住民文化の理解・継承と博物館」
座長：本多俊和（スチュアート　ヘンリ）氏（放送大学教授）

北原　次郎太氏（アイヌ民族博物館学芸員）
「『アイヌの人々を理解する』とは
　―学芸員講話の実践例から―」
　学校等の要望で行っている解説の実践と、その反応を題材に、民族共生のために何を伝えるべきか考えたい。
　アイヌに関する学習の目的として挙げられるのは、国内文化の多様性を知ること、自然との接し方を学び環境問題の糸口をつかむこと、あるいは人権を学ぶなどだが、いつの時代のことか認識されぬまま、「伝統文化」や差別にのみ注目されがちである。ここには、当事者のアイヌが文化や権利について学ぶ視点が欠け、非アイヌにとっては、同時代のアイヌについて知る機会が保障されていない。過去と現在の隔たりを知らない人との接触は、様々な困惑やストレスにつながる。また、「既に滅んだ」「時代に取り残されて辺境にいる」といった印象を抱く人もおり、ともに社会を築くパートナーとは見なされない。
　「アイヌの人々を理解する」とは、過去の文化だけを学んで済むことではなく、また、現代のアイヌについて知ってもなお不十分だと感じる。アイヌと自らの立場や歴史を相対化し、「相互理解」することこそが必要ではないか。

ジル・ベアード氏（ブリティッシュ･コロンビア大学；UBC人類学博物館）
「変化のための博物館の共同事業　―UBC人類学博物館リニューアル・プロジェクトの事例から―」
　UBC人類学博物館では、施設の拡張と同時に、教育・公開プログラムとして「人びとのパートーナーシップ」と名付けられたプロジェクトを進めている。資料が所有されていたコミュニティとの協力・信頼関係を築き、先住民が利用しやすい博物館環境をつくり、研究の質や来館者への理解を高めることも意図している。
　具体的には、収蔵展示を行い、データベースを整備してインターネットで公開するなど、多くの収蔵品にアクセスしやすくしている。一方、儀礼具など文化的にセンシティブな収蔵品専用の部屋もあり、先住民も職員も特別な手続きを経なければ利用できないものもある。また、緊張感をほぐせるようなラウンジスペースや、口承伝承や映像作品などを視聴し学ぶことのできるラボや、儀式のために煙の使用や飲食ができる部屋もある。展示では、「マルチバーシティ」という（ユニバーサルとは対照的な）考えのもと、一般化をせずに、個人・各コミュニティ・各民族のものの見方を理解し、それぞれの世界観を示せるよう、グループでの議論を重ねている。
　博物館を境界にあるものとして位置づけ、人びとをつなぐ機能を持たせるという、進行中の活動である。

●総合質疑・討論
各発表と質疑をふまえ、特に多くの関心が寄せられた「現代の展示で伝えるべきこと（物）は何か」「誰が資料を選ぶか」などについて、意見交換や議論がなされました。発表と討論の詳細は、年度末に刊行予定の報告書をご覧いただきたいと思います。
＊　＊　＊
　なお、関連事業として10月11日に『地球交響曲第三番』（龍村仁監督・1997年）の上映会を行い、100余名の市民が映画を鑑賞しました。（学芸グループ　齋藤玲子）

ロビー展

第1回国際口琴フェスティバル関連事業
北海道文化財保護強調月間協賛事業『世界の口琴』

2008.10.31-11.30

口琴は、木や金属などを材料にした、口元で演奏される小さな楽器です。音を出す弁と、弁を固定する枠からできており、弁を直接弾いたり、弁や枠に付けられたひもを引いて弁を間接的に振動させることによって演奏します。

このロビー展では、日本口琴協会との共催により、北方地域を中心とした世界各地の口琴と、関連する民族資料をあわせて約200点を展示しました。

展示では、まず「世界の口琴」コーナーで、中央アジアから東南アジア、ネパール、中国など世界各地の多様な口琴を紹介しました。次に「北海道アイヌの口琴『ムックリ』」のコーナーでは、ムックリや演奏するアイヌの姿をモチーフにした絵はがきや人形などを展示し、ムックリがアイヌ文化の象徴とされてきたことを紹介しました。

口琴は目立たない楽器ですが、ロシア連邦サハ共和国では金属製口琴「ホムス」が国民的な楽器として親しまれています。「サハ共和国の口琴『ホムス』」のコーナーでは、さまざまなホムスやサハの民族衣装などで、サハ共和国の口琴と民族文化を紹介しました。

サハの口琴「ホムス」の制作過程の展示

「シャマンと口琴」のコーナーでは、シャマンの衣装と口琴、弦楽器や太鼓などを展示しました。シャマンは特別な状態で超自然的な存在と接触しますが、口琴は他の楽器とともに、シャマンがそうした状態に入るのを助けるための道具でもあったのです。

口琴の演奏では、動物の鳴き声、水の音など、自然の音がモチーフとなることがあります。「動物と口琴」のコーナーでは、口琴本体やケースにシカやウマなどさまざまな動物の姿を取り入れたものを展示しました。

これらの他、口琴製作の様子を撮影した映像展示や、金属製口琴やムックリを自由にさわっていただけるような体験コーナーも設けました。　（学芸グループ　中田　篤）

ワークショップ

『素晴らしき口琴の世界　演奏体験とコンサート』

2008.11.1

第一部では、日本口琴協会の直川礼緒（ただかわれお）さんの指導により、ワークショップ「口琴を弾いてみよう」をおこないました。

まず、直川さんご自身の演奏を交えながら、口琴の構造や音の鳴るしくみについての解説がありました。簡単な構造にもかかわらず、口の形や息づかいによってさまざまな音色が表現され、参加者の方々も驚いた様子でした。そして、「世界の口琴」展の各コーナーを観覧しながら、口琴の多様さや各地の民族文化とのつながりを紹介していただきました。

その後は、演奏体験をおこないました。当館所蔵の金属製口琴を使い、直川さんの指導の下で参加者の方々に実際に口琴を弾いていただきました。

第二部は、キルギス出身の口琴奏者ウメトバェワ・カリマンさん、ムックリ・トンコリ奏者の郷右近（ごうこん）富貴子さんによるコンサートです。

まず、カリマンさんにキルギスの伝統な弦楽器や木製、金属製の口琴を使った演奏をしていただきました。特に口琴に合わせてヤギの人形が動くカラクリ仕掛けの道具を使った演奏では、多くのお客さんの注目を集めていました。

次に郷右近さんがムックリとトンコリの演奏、そして飛び入りの郷右近さんのお母さんといっしょに歌を披露していただきました。演奏の合間には、楽器の構造や材質、そしてこうした楽器に関わるアイヌ文化についても紹介していただきました。

最後に、カリマンさんと郷右近さんお二人による口琴の合奏がありました。

「口琴」というと、日本ではあまり馴染みのない楽器ですが、当日はたくさんの方にご参加いただき、大盛況のうちに行事を終了することができました。

カリマンさん（左）と郷右近さんによる口琴の合奏

（学芸グループ　中田　篤）

アイヌ文化講習会

『キナ織り』

2008.9.14

キナとはアイヌ語でござ様の敷物のことで、そのミニチュアをつくる催しを行ないました。平成17年に、同様の講習会を開き、好評だったものの、道具や材料の制約から参加人数が限られていたことや、時間が短く小さなものしかできなかったことなどから、再度開催することにしました。今回も講師は浦河町在住の遠山サキさんにお願いし、娘の堀悦子さんにも指導のお手伝いをしていただきました。

素材はガマの葉で、黒と赤の文様の部分はシナノキの樹皮です。イテセニと呼ばれる木製の織り機には、重しをつけた糸を掛けるために等間隔に刻み目がついています。これらの道具と材料は、すべて講師に用意していただきました。

最初のジグザグの文様を入れるあたりまでは、講師に質問を重ね、何度も見本を確かめながらの作業で、午前中ははかどりませんでした。しかし、基本を覚えてしまえば、あとは同じように織り進めることができるので、午後には編むスピードも速くなりました。

でき上がりは幅17cm・長さ22cmほどで、絵手紙などの葉書を飾るのにちょうどよい大きさです。文様の位置を間違えたり、織り目がなかなか揃わなかったりと苦戦した方もいらっしゃいましたが、予定していた４時間でほぼ全員が完成させました。参加者からは「実際に手仕事を経験できてよかった」「記念になる」「家に飾りたい」等の感想をいただきました。

（学芸グループ　齋藤玲子）

各自の作品をもって記念撮影。
前列左から２番目が堀氏、３番目が遠山氏。

北海道博物館紀行

『白滝郷土館』

2008.9.20

「北海道博物館紀行」は、道内の博物館を紹介するものです。今回は、「白滝郷土館」の瀬下直人氏を講師に迎え、郷土館の取り組みを紹介いただき、併せて石器づくりの指導をお願いしました。以下に概要を紹介します。

最初に白滝遺跡の特徴を中心に紹介いただきました。白滝は、２万数千年前の旧石器時代の遺跡が多いところで、昭和初期から現在まで発掘が続けられています。遺物は主に黒曜石（ガラス質の火山岩）で作られた狩猟道具の槍（やり）先やナイフ、動物の皮をなめす掻（そうき）器などです。どれも旧石器時代人には欠かせない生活道具で、遺跡の多くは石器製作の場所と考えられています。そして白滝産の黒曜石は、北海道に限らず北はシベリア、南は新潟県まで流通し使用されていたことがわかっているそうです。このように白滝は旧石器時代の「石器工場」として重要な地域であり、国指定史跡にもなっている日本の貴重な財産であると紹介いただきました。

写真中央が瀬下氏

次に葉の形をしたナイフの作り方を教えてもらいました。丸い石を使って黒曜石を割って形を整え、鹿の角で端を削り、切れ味を鋭くするとナイフができあがりますが、これがなかなか大変で参加者の皆さんには少し難しかったようです。しかし、瀬下さんが前もって途中まで作り上げた石器を準備しておられたので、多くの参加者が自分なりの「ナイフ型石器」を仕上げることができました。

当事業は、年齢を問わずご参加くださった多くの方々に満足いただけたと思います。

（学芸グループ　角　達之助）

調査・研究

『カムチャツカ調査報告 —サケ孵化場の訪問—』

2008.7.28～8.19

カムチャツカは「サケの国」として知られ、人もクマもサケの恵を享受してきました。カムチャツカで商業的サケ漁が始まっておよそ110年が経過しましたが、現在、カムチャツカのサケの人工孵化施設はわずか５ヶ所にしか過ぎません。しかも、それらはすべてカムチャツカ半島南部に位置し、２ヶ所はオホーツク海に注ぐボリシャイア川の支流に、その他の３ヶ所は州都ペトロパブロフスク＝カムチャツキーが位置するアヴァチャ湾に注ぐ河川に位置しています。その他の河川では自然産卵によってサケの個体群は維持されていますが、カムチャツカの自然の懐の深さを感じずにはいられません。

以前からサケについて強い関心を持つ者としてサケの孵化場を訪問したいと思ってきましたが、実現しないままでした。今回の調査でようやくボリシャイア川の支流ブイストラヤ川のさらに支流に位置しているマルキ・サケ孵化場を訪問することができました。施設全体は1994年に改築され、近代的な設備を備える施設となっています。クリーム色の孵化施設は、今まで一度も見たことがないようなコンクリート面もきれいな仕上がりでしたが、はたしてアイスランドの企業が設計・施工したものでした。

同孵化場はマスノスケとベニザケを専門とする施設で、近接する２ヶ所の捕獲施設から親魚が持ち込まれます。56歳になる所長のリュドミラ・サハロフスカヤさんに施設を案内していただきましたが、孵化作業はまだ始まったばかりで、水槽は一部しか使われていませんでした。稚魚には冬季間、餌を与えて飼育し、５月に放流するということです。

（学芸グループ　渡部　裕）

マルキ・サケ孵化場の入口にて、中央がサハロフスカヤ所長、その右が地理学研究所カムチャツカ支部のV.ペートロシェヴァ教授、左端は筆者

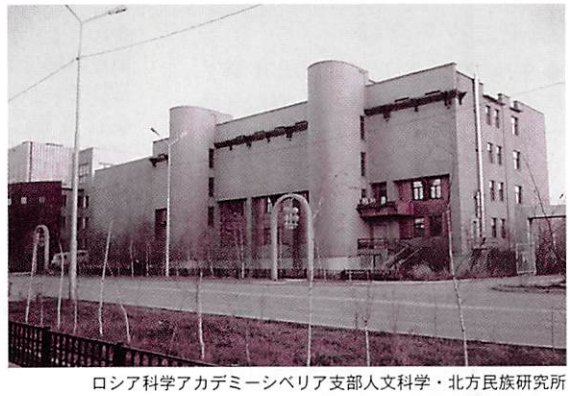
調査・研究

『サハ共和国調査』

2008.10.3～14

今年度より、総合地球環境学研究所の研究プロジェクト「温暖化するシベリアの自然と人」が始まりました。このプロジェクトは、温暖化が進行するシベリアの環境変化と、そうした変化が人間生活に与える影響について、自然・人文科学両面から明らかにしようとするものです。共同研究者として、先日予備調査に行ってきましたので、その内容についてお知らせします。

私自身の研究テーマは、温暖化が森林地域のトナカイ牧畜に与える影響を明らかにすることです。そのため、プロジェクトの中心的調査地であるロシア連邦サハ共和国を訪れ、現地関係機関と協力関係を作ること、調査地を絞り込むこと、そしてサハのトナカイ牧畜に関する資料の収集を目的に予備調査をおこないました。なお、今回のサハ訪問は、当館と研究協力協定を結んでいる（８頁参照）東北大学東北アジア研究センターの高倉浩樹准教授にご一緒いただきました。



ロシア科学アカデミーシベリア支部人文科学・北方民族研究所

まず、ロシア科学アカデミーシベリア支部人文科学・北方民族研究所を訪ね、研究協力を依頼しました。この訪問は、プロジェクトの現地共同研究者の助力もあり、順調に進行しました。そして、調査地としてトンポン地区を推薦していただきました。次に、世界トナカイ放牧者連合の副会長マリヤ・パガダエワ氏を訪ねました。彼女はトンポン地区出身で現地の事情に詳しく、最近の状況を伺い、受入先を紹介していただくことができました。

そして共同研究者の協力によって、サハのトナカイ牧畜に関する統計資料を入手することもできました。

次年度から５年間の研究期間中に、トナカイ牧畜の変化、そしてそれが気温や放牧地の状態などとどのように関係しているのかといった点について調査を進めていく予定です。

（学芸グループ　中田　篤）

東北大学東北アジア研究センターとの学術交流協定について

東北大学東北アジア研究センター（仙台市）と当館は、シベリア民族誌研究及び北方文化研究にかかわる学術分野の発展を目的として、両組織間の緊密な協力と研究上の交流を推進するための協定を、平成20年９月９日、東北アジア研究センターにて締結しました。

当館の学術交流協定締結先は、平成17年のアラスカ大学北方博物館、サハ共和国国立ヤクーツク北方民族歴史・文化博物館に続き三件目となります。

学術交流協定締結時の記念撮影　左から
谷本一之当館館長、瀬川昌久東北大学東北アジア研究センターセンター長、高倉浩樹准教授

INFORMATION

モニター会議

◆９月12日［金］に平成20年度第１回モニター会議を開催し、利用者増対策や、地元への効果的なPRについて活発に意見が出されました。

行事報告

◆11月３日［月］に北海道教育の日協賛事業「北方民族博物館シアター」を開催し、北方に関するＤＶＤ上映や、紙芝居を行いました。

◆10月１日から11月９日までの期間、網走湖岸で開催された、モヨロの夜祭りで、パネル展示を行いました。

◆10月５日［日］に常呂少年自然の家（北見市）で開催されたネイチャーフェスティバルに参加しました。

◆11月15日［土］に学芸員講座④「北方諸民族の楽器」（講師：谷本一之館長）を開催しました。

◆11月23日［日］に、網走市の「あばしり学び塾」に参加し、当館では革ストラップづくりを行いました。150名を超える参加者に楽しんでいただきました。

避難訓練・救急救命講習

10月24日［金］には避難訓練を、12月４日［木］には救急救命講習を行いました。

職員の異動

退職　北出　一明

北方民族博物館だより
No.71

平成20(2008)年12月24日発行
編集・発行　北海道立北方民族博物館
〒093-0042 北海道網走市字潮見309-1
電話 0152-45-3888　fax 0152-45-3889
e-mail：tonakai@hoppohm.org
http：//hoppohm.org
指定管理者
財団法人北方文化振興協会